

品性が知能の格差を生む

私の研究所(石井教育研究所)では、四～六人の幼児を一クラスにして指導していますが、同じ三歳児のクラスでも、指導が容易な組と大変な組とあります。生後まだ三年にしかならないというのにそれだけの格差が出来てしまっているのです。

遺伝による格差もあるでしょうが、孔子が「性相近し、習相遠し」と述べているように、生後三年間の家庭教育の違いが、この格差を作っていることを、幼児たちを直接指導してみて私は痛感させられています。

しかし、問題なのは、知能や知識の格差ではなく、学習意欲や品性のそれです。入試で重視される“知識”は、いわば道具であって、それを使う人の品性の高い低いによってその価値も上下します。

ところが、今の母親の多くは、知性や知識を重視して、それより重要な学習意欲や品性を育てることには鈍感です。本末転倒と言わなければなりません。

「本立って道生ず」です。品性が高く、学習意欲が強い者は、知識がどんなに豊かになっても決して驕らず、いよいよ努力して止みません。ところが、品性の卑しい者は、わずかな知識でも鼻にかけて、地道な努力を怠ります。

そういう品性における格差が、私の指導している三歳の幼児にすでに明瞭に現われているのです。「三つ子の魂百まで」ですから、何

と恐ろしいことではありませんか。

幼児は、四六時中、母親の姿を追って暮しているのですから、自然と親の言行を見倣って、親に似るのだと思います。だから、「蛙の子は蛙」「瓜の蔓には茄子は成らぬ」と言われるわけです。

だから、親たる者は、常にわが子にまねられていることを意識して、立派な手本を示すことに努力する必要があります。昔の親は、確かにそれを意識して、気取っていたように思います。悪く言えば「猫をかぶっていた」ということですが、今の若い親にはそれが全くありません。

正直と言えば聞こえが良いが、それは「馬鹿正直」というものです。悪い手本を示すことでわが子の品性を下劣にするばかりではありません。

「あの親爺大学出だのにほんとな どうもあやしい教養の無さ」(中三男)と、わが子に軽蔑されるようになるのです。親も不幸ですが、子も不幸です。

「猫をかぶる」「偽善」ということは、悪いことのように思われていますが、「心の欲するところに従って矩を越えず」という境地は孔子の晩年のことです。孔子も「偽言」、つまり努力して善を行ない、それが「習、性となる」で、真の善に達したのだと思います。

文化とは、自然を磨くことです。自然のままでは文化は成り立ちません。それは人為ですから「偽」です。偽善でよいのです。気張ってわが子のために尊敬できる親の姿を見せてやろうではありませんか。